

共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」

2021年度第2回研究会

日時：2022年2月8日（火曜日）15時00から17時00分

Zoomによるオンライン開催

当日のプログラム

1. 小沼孝博（AA研共同研究員，東北学院大学）

「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求：『ハミード史』序論の検討から」

2. 全員

討論

参加人数：28名

報告

本研究会は、近代以前の中央ユーラシアにおける歴史叙述の系譜について考察し、それが後代の歴史認識・解釈に与えた影響を議論するものであった。東トルキスタンの事例を扱った小沼報告は、中国における歴史叙述の影響を明らかにした。イスラーム的なヒストリオグラフィーのみならず、外からの影響も考慮に入れる必要性を示したと言えるだろう。以下、報告の概要を示す。

ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求：

『ハミード史』序論の検討から

小沼孝博（AA研共同研究員，東北学院大学）

本報告は、新疆南部（東トルキスタン）における代表的な史書である、ムッラー・ムーサー・サイラーミー（1836-1917）の『ハミード史』（*Ta'rikh-i Hamīdī*, 1908年）の「序論」に注目し、著者による「過去の参照」のあり方、それによって構成された歴史叙述の特徴について検討を試みた。

19世紀後半のムスリム反乱からヤークーブ・ベグ政権の成立、そして清朝再征服へと続く新疆動乱期の諸事件を活写した『安寧史』（*Ta'rikh-i Annīya*, 1903年）、その増補改訂版である『ハミード史』の本論（第1部、第2部）は、当該時期の歴史を知るための基礎史料として広く活用されてきた。他方、本論の「前史」にあたる序論は、著者が直接経験していないことがらを「過去の参照」によって構成された歴史叙述であり、地域史としての性格を有する。そこでは、史書と口碑から有用な情報を選択的に引用し、必要に応じて改変、追加、消去、再構成がなされ、著者

の批評が随所に挿入されている。テュルク語で執筆されてるとはいえ、近世ペルシア語史書の定型スタイルを踏襲した叙述構成を具備している。

次に、「過去の参照」の傾向を窺うべく、いくつかの事例を検討した。序論前半では、主にティムール朝以来のペルシア語史書が参照されている。ゆえにノアの時代から説き起こされ、テュルクとモンゴル（モグール）の系譜上の関係にも言及されるが、著者のモンゴル（カルマク／オイラトを含む）に対する評価は概して否定的である。また、ドゥグラト家アミールの系譜と事跡（第3章）を、モグール・ウルスのハンら（第4章）に先行して配置するが、これは、著者が高く評価し、本論冒頭に登場する清代のアフマド王への系譜の接続を意識したものであろう。史書の参照という点において異彩を放つのがGangjangという中国史書であり、クルバンガリーの『東方五史』からの孫引きによって利用されている。本報告では、このGangjangが漢語の「綱鑑」の音写であることを特定し、それを書名に冠した明清時代の史書の記載との比定をおこなった。

史書のみならず、著者は多くの口碑（伝承、風聞）を情報源としてふんだんに利用している。本報告では、著者が祖先から伝え聞いた200年前の移住伝承、及びジャハーンギールの「聖戦」に関する記述について考察した。第5章を構成する後者については、前半部で事件の展開がコーカンド史料『シャールフ史』にもとづき叙述される。一方、口碑によると思しき後半の捕縛シーンでは、アフマド王の父であるイスハークの役割が強調されており、これもやはり本論への接続を意識したものと推測される。

従来『安寧史』及び『ラシード史』は、史実の解明のほかに、“プロト・ウイグル・ナショナリズム”の様態を探る史料として活用されてきた。本報告では、「過去の参照」という点からのアプローチが、それとは異なる当該史料の持つ性格を理解する上で有効であることを示した。

総合討論では、この著作に従来から帰せられていたウイグル民族意識の萌芽という特徴を、どのように見るかについて議論が集中した。本共同研究が当初目的としていたように、ナショナルな側面が考察の重要な要素となるのは言うまでもないが、その反面、近代以前の文脈から過去との接続を考えておくことも必要であることを改めて考えさせられた。近代における歴史叙述の多面的な解釈については今後も大きな課題となると思われる。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.